

平成25年度 課外授業講師派遣 活動レポート

第1回 小矢部市立大谷小学校

5月21日(火)、牧田和樹氏(株牧田組取締役社長)が小矢部市立大谷小学校において、6学年79名を前に、「夢をかなえる」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、「今と未来がつながる仕組みの話をして」とはじめた。「小学生の皆さんは将来大人になって仕事をします」と語りかけ、「仕事」とは何かをすること、「働く」とは端(周り)を楽にすることと説明。そして、「何をするのか、何のためにするのか」をしっかりと考えることが大事だと述べた。また、「仕事」は誰かの役に立つから存在すると紹介し、必要とされない「仕事」は存在しないと続けた。

そのうえで「何をするのか、何のためにするのか」こそが「夢」だと強調した。

子どもたちに今の「夢」(就きたい仕事)を自由に答えてもらい、その中から保育士を例にとり、保育士になるために必要なことは何かとさらに問い、子どもたちの答えをグループ化して、①自分で努力すること、②他者の協力を受けることの2つに類別できると説明した。とりわけ他者の協力を得るためには、「思いやり」が大事だと強調した。

最後に、「夢をかなえる」ためには、①心＝思いやり、②体＝運動、③頭＝勉強に毎日一生懸命取り組むことが大切だと熱く語り、授業を締めくくった。



「心、体、頭を鍛えよう」と語る牧田社長

第2回 富山市立奥田中学校

6月5日(木)、山野昌道氏(株チューリップテレビ常務取締役)が富山市立奥田中学校において、2学年245名を前に、「人生を楽しくする3つのコツ」と題して課外授業を行った。

山野常務は、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」を控えた生徒たちに「なぜ働かなければならないのか」と問いかけた。「自分を成長させるため」や「自分の夢をかなえるため」より「ごはんを食べるため(生きるため)」を選んだ生徒が圧倒的に多いことに、「その通り。生きるためには働かなければならない」と呼びかけ、「役割分担して働き、社会はみんなで作るものだ」と続けた。そして、「14歳の挑戦」を契機に、働くことの意義を考えてほしいと説いた。

また、自分のやりたいことや夢は簡単にはわからないが、それでも何かを見つけるためには、

考え続け、行動し続けることが大切だと強調した。

そして、人生を楽しくするためのコツとして、①迷ったらやる、②人のせいにしない、③何やってもうまくいくと考える(ポジティブシンキング)の3つをあげ、人生で選択に迷った時、「どちらが正解だったか絶対わからない。自分が選んだほうを正解にしていこう」と訴えた。

最後に、充実した学生生活を送るために「未来は今日一日の積み重ねだ。一日一日を無駄なく大切に生きよう。そして一生の友達を作ろう」とエールを送った。



「やりがいのある仕事はつらくて厳しい仕事」と山野常務

第3回 射水市立射北中学校

6月20日(木)、牧田和樹氏(株牧田組取締役社長)が、射水市立射北中学校において、2学年126名を前に、「夢をかなえる」と題して課外授業を行った。

牧田社長は冒頭で、生徒たちに自分の好きな食べ物を聞き、それを買うにはお金をどう工面するかについて考えさせた。生徒からは「もらう」「働く」などの回答があった。

そこで、まず「もらう」行為を例にとり、親に買ってほしい物がある時にはテストでよい点数をとるなど親が喜ぶことをしようとしたり、友達になりたい時には思いやりの心で相手に接しようとしたりして「人間は人との関わりあいの中で生きている。人間関係をうまくするには相手を思いやって行動することが大切」と説明した。

また、お金の受け払いについて、お金は払う

人の気持ちを満足させてはじめてお金を出したいと思うものであり、それは人間関係と同じであると語った。

次に「働く」ことについて説明。「『働く』は人が動くを書く。何のために動くかを考えることが大切である」と述べ、それは誰かの役に立つため、これが「働く」ことの原点だと力説した。

最後に、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で職業体験するにあたり、「仕事は人の役に立つためにするというをしっかり」と心に留め、将来について考える機会にしてほしい」と語り、授業を締めくくった。



人の気持ちを考えて行動しようとする牧田社長

第4回 富山県立となみ野高等学校

6月21日(金)、林和夫氏(朝日建設(株)取締役社長)が富山県立となみ野高等学校において、1・2学年84名を前に、「学ぶこと、働くこと」と題して課外授業を行った。

林社長は、まず、人間が他の動物と異なる点は頭と社会性を有し頭を使い広く社会と関わる点だと語り、様々な問題解決のためには勉強が必要と呼びかけた。そして、「学ぶ」は「真似ぶ」と述べ、コンピュータに情報が入っていないと意味がないことを引き合いに出し、「からっぽの頭から創造力は生まれない」と、読み書きそろばん・暗記が大切であると訴えた。

また、京セラの稲盛和夫名誉会長の「能力は才能、経験、意欲、考え方の掛け算」という言葉や、イチローの「結果も大事だがプロセスの

方が大切。シーズンを通してベストを尽くすための準備を怠ったことはない」という言葉を引用し、考え方やプロセスが能力を導き出すために一番大切であると強調した。

さらに、国字「働く」の語源は「端(周りの人)を楽にすること」と説明し、「働くのは自分のためではなく、人や地域社会のため」で「お金のために働くのではなく、役に立つ仕事をしてお金をもらう」と熱く語った。

最後に、自身の介護経験などから、「人間が生きているには必ず意味がある」「いのちとは自分の使える時間」といのちの大切さを訴えて、課外授業を終えた。生徒の謝辞に応える林社長



第5回 黒部市立宇奈月中学校

林和夫氏(朝日建設(株)取締役社長)が1学年45名を前に、「夢をもって」と題して課外授業を行った。

林社長は、冒頭で吉田松陰の「夢なき者に理想なし、理想なきものに計画なし、計画なきものに実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし」の言葉を紹介し、夢をもつことは大切だと語った。そして、英語の「哲学」の語源は「知ることを愛すること」と解説し、「よりよく生きるためには、よりよく知らなければならない。からっぽの頭から創造力は生まれない」と読み書きそろばん・暗記の重要性を力説した。

また、コミュニケーションのとり方について、ボールを言葉に見立て、実際に生徒とキャッチボールをしながらわかりやすく説明した。

続けて、「働く」とは「端(周りの人)を楽

にすることであり、自分のためでなく人の役に立つため働くのだ」と説いた。そのうえで、自分の夢は「建設工事を通じて世の中の役に立つこと(ふるさと富山の発展)」であると熱く語った。

そして、聖路加国際病院の日野原重明理事長が全国の小学校で行っている「いのちの授業」を紹介し、「いのちは自分の使える時間だ。大きくなったら時間を人のために使おう」と生徒に訴えた。

最後に、詩人工藤直子氏の詩「でっかいこころ」を朗読し、大きな夢をもって人生を歩んでももらいたいとエールを送り講演を終えた。「大きな夢を持とう」と語る林社長



牧田和樹氏(株)牧田組取締役社長)が2学年48名を前に、「よりよく生きる」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、秋に「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」に取り組む生徒たちに、「人間は、人と人がつながる社会で生きていて、個々に『心』、『意識』、『気持ち』があり、みんな同じではない。自分と相手の関係で大切なことは思いやりの気持ちを持つこと。相手に好意を持ってもらうためには相手の立場に立って考えることが大事である」と説いた。さらに人間の心の仕組み(本能と理性)について図を使って説明した。

また、あいさつの大切さにも触れ、あいさつは相手を認める最初の行為でありすべてに通じ

ると述べた。

最後に「14歳の挑戦」の心構えとして、「職場でやっていることはすべて相手の役に立ち、思いやりにつながる。人間関係も仕事も基本は同じでみんなつながっており、職場体験で得た知識や経験は必ずみなさんの血となり肉となるはずなのでしっかり学んできてほしい」と熱く語り、授業を締めくくった。



相手を思いやる心で行動するよう呼びかける牧田社長

大橋聡司氏(大高建設㈱取締役社長)が3学年50名を前に、「夢をもつこと」と題して課外授業を行った。

大橋社長は、建設業としての社業を紹介しながら、同事業での「夢」は見えないところで縁の下で力持ちとして、住民の安全安心を守ることだと語った。また、巨大レストランをオープンさせたが事業からの撤退を余儀なくされた後、問題点を解決し、再チャレンジ精神を持って新たなレストラン経営を軌道に乗せることができた経歴を紹介。「失敗したら振り返ってその原因を考えることが大事で、それが成長することである」と力説した。

また、自社レストランの経営理念は、「存在感謝」を大切にしていることであると述べ、「感謝することのできる人は将来感謝される人になる」と論じた。

また、イチローが小学6年生の時に書いた作文「将来の夢」などを引用し、夢を実現しようという強い願望を持って苦しい練習を乗り越え、夢を達成することができた人生を紹介。「将来の夢をより具体的、現実的なものにして、それに向かって是非頑張りたい」と激励した。

最後に、同校出身者が各分野で活躍している事例を紹介し、母校の生徒にエールを送って授業を締めくくった。



「夢を実現するという強い願望を持とう」と語りかける大橋社長

第6回 高岡市立戸出中学校

7月22日(月)、中尾哲雄氏(㈱インテック最高顧問)が高岡市立戸出中学校において、2学年138名を前に、「元気に生きよう」と題して課外授業を行った。

中尾特別顧問は冒頭、「私のこれまでの歩み、経験したことを若い皆さんにお伝えしたい」と話し、授業がスタートした。まずは、小学2年生の頃、妹と犀潟駅で電車を待ちながら途方に暮れているときに見知らぬ女性からおにぎりとお菓子をもらったエピソードを紹介し、感謝の気持ちを伝えること、お礼をすることの大切さを説いた。そして、社会のために貢献すること、役に立つことがいろいろな人へのお礼になると語った。

また、自身の小学校時代の体験を紹介し、「感動・感激を積み重ねていくことが心を豊かにする」と熱く語った。

その後、小学校時代から社会人に至るまで、それぞれの年代でどんな夢をもって生きてきたかを紹介しながら、夢を持つこと、その実現のために具体的な目標を持つことの大切さを訴えた。

授業の後半には、何をするうえでも一番大切なこととして、「元気であること」と「心の優しさ」を挙げ、自身の優しい心を持つための方法として、俳句を通して自然に親しむことやふるさとの歌を歌うことなどを紹介した。

最後に今後社会に出ても母校やふるさとに自分の心の根っこを置きながら活躍していただきたいとエールを送り、授業を終えた。



「優しい心を育ててほしい」と呼びかける中尾特別顧問

第7回 立山町立雄山中学校

9月18日(水)、町野利道氏(コーセル㈱取締役会長)が立山町立雄山中学校において、2学年250名を前に、「ものづくりに魅せられた」と題して課外授業を行った。

町野会長は、まず「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」の取組みを前にした生徒たちに、「自分の歩んできた道が参考になればよいが、大切なことは自分で考え、自分で行動し、自分の道を見つけていくことだ」と述べ、自身のものづくりの体験を語った。そして、「自分のやったことが判らなくても、あとでしっかり勉強すれば理解できる。やってみることが大事だ」と呼びかけた。授業の前に立志式を終えたばかりの生徒たちは熱心に聴き入っていた。

また、自身は中学2年生でエンジニアへの道を決めたが、進路は早く決めればよいわけでは

なく、考えてばかりで行動しないのはよくないと繰り返し力説した。

そして、「何をするにしても『人間力』(人格)が重要で、人間力をベースに知識や創造力があって仕事ができる。仕事とは社会に貢献することだ」と熱く語った。

さらに、やりたいことをやることは大切だが、その前にやっておかなければならないこと－勉強－があると訴え、「失敗は成功のもとだが、失敗を積み重ねて成功まで持っていくことが重要だ」と激励した。

最後に、「友人を多く持って、お天道様に恥ずかしくない生き方をしてほしい」とエールを送り、授業を終えた。



失敗はそのままにしておいてはいけないと町野会長

第8回 黒部市立桜井中学校

9月19日(木)、四十物直之氏(株四十物昆布取締役社長)が黒部市立桜井中学校において、2学年157名を前に「働くこととは？ 皆さんに伝えたいこと」と題して課外授業を行った。

四十物社長は、はじめに「働くこととは人の役に立つことをすること」と語り、思いやりの心を持ち、当たり前のことを積み上げて、自分のやりたいことをしっかりとやることが大切だと訴えた。

そして、スカンジナビア航空の元社長ヤン・カールソン氏の著書『真実の瞬間』より「二人の石工」の話を紹介。「いやいや仕事をする」と「誇らしげに仕事をする」の違いを説明し、「積極的に仕事に取り組むことのできる人になってほしい」と述べた。

さらに、スペインの宗教家フランシスコ・ザビエル、イギリスの女性旅行家イザベラ・バー

ドやフランスの詩人ポール・クロードルなどの言葉を紹介し、「日本人は昔から勤勉、正直、親切、謙虚、素直、感謝といった徳目を規範に暮らしてきた。世界から大変高い評価を受けている。自信を持つことが大事だ」と熱く語った。また、挨拶をしっかりとすることの重要性も強調した。

最後に、「どんな些細なことでも、どうしたら人が喜ぶのか、幸せになるのかを考えて行動しよう」と呼びかけ、「失敗し、苦しみ悩むことは無駄ではない。苦しい体験を通してよい生き方が身につく」とエールを送り、授業を終えた。



人や地域のために役立とうと語る四十物社長

第9回 富山市立堀川中学校

9月24日(火)、牧田和樹氏(株牧田組取締役社長)が富山市立堀川中学校において、2学年187名を前に、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』の楽しみ方」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」の取組みを間近にした生徒たちに、言葉には意味があると語りかけ、「仕事」とは事に仕えること、「働く」とは人が動くことであると説明。そのうえで、「誰が、誰のために、何をするのか」をしっかりと考えることが大切だと力説した。

そして、木下晴弘氏の著書『涙の数だけ大きくなれる！』より「あるレジ打ちの女性」を紹介し、この事例から仕事の意義を問いかけた。生徒たちの考えを聴いたうえで、仕事には人の役に立つこと、自分を成長させることの2つの意義があると強調した。

そこで、「14歳の挑戦」では、積極的に「仕事」

をして、人の役に立つ喜びを実感し、今までの自分とは違う成長した自分を感じて欲しいと呼びかけた。

最後に、職場体験だけではなく、日々の生活を送るにあたって、「人の役に立つためには、相手の立場に立って考えることー思いやりー」が必要だ。常に思いやりを持って自分の周りの人に接すると、どんな役に立ったらよいのか必ず判る。そしてそれを行動すればよい」とメッセージを送り、授業を締めくくった。なお、この授業は牧田社長も参加し8月に実施した第4回海外教育事情視察に参加した教員の勤務校で行った。



思いやりをもって行動するよう呼びかける牧田社長

第10回 富山県立魚津高等学校

10月5日(土)、若林啓介氏(株若林商店取締役社長)が富山県立魚津高等学校において、1学年201名を前に「人間到处有青山(じんかんいたるところせいざんあり)」と題して課外授業を行った。

若林社長は、はじめに高校時代のアメリカ留学や商社勤務時代のドイツ駐在での経験を語った。商社時代には、上司から「あなたは一担当者だが会社を背負っている。皆見ているので常にそれを忘れないように行動してほしい」「今は担当者だが、課長や部長になった時にどう行動するか考えて行動してほしい」と言われたと述べ、現在自身も社員に問いかけていると紹介した。

そして、新卒者の離職について「石の上にも3年」と語り、自分に向いている仕事は少なく、仕事に自分を合わせる努力が必要であると強調した。

また、価値観の相対性にもふれ、自分の価値観にこだわらず共通の価値観を持つことの重要性を説いた。

さらに、平均寿命、一人当たりのGDPや殺人件数などを世界と比較して、日本は豊かで安全な長生きできる「恵まれた国」と語る一方で、人口減少やグローバル化などが国力の相対的低下の招くのは間違いないので対応が求められていると訴えた。

最後に、「演題にも想いを込めたが、多くの可能性を秘めた皆さんは自分を狭いところに閉じ込めておかず、英語を勉強し世界を見つめて活躍をして欲しい」と激励し、授業を終えた。



世界で活躍することを期待すると若林社長

第11回 富山市立南部中学校

11月8日(金)、山野昌道氏(株チューリップテレビ常務取締役)が富山市立南部中学校において、全学年520名を前に、「人生を楽しむ3つのコツ」と題して課外授業を行った。

山野常務は、生徒たちに「なぜ働かなければならないのか」と語りかけ、「社会は役割分担で成り立っている。みんなで作るものだからだ」と説いた。そのうえで、働く意味はひとつではないので、勉強してほしいと述べた。

また、自分のやりたいことや夢は簡単にはわからないし、夢はどんどん変わっていくと語り、それでも何かを見つけるためには、考え続け、行動し続けることが大切だと強調した。

さらに、「やりがいのある仕事はつらくて厳しい仕事だ。苦勞のないところにやりがいはない。やりがいは自分でつくるものだ」と力説し

た。

そして、人生を楽しむための3つのコツとして、①迷ったらやる、②人のせいにしない、③何やってもうまくいくと考える(ポジティブシンキング)をあげ、「人生で選択に迷った時、どちらが正解だったか絶対わからない。自分が選んだほうを正解にしていこう」と激励した。

最後に、充実した学生生活を送るためとして「未来は今日一日の積み重ねだ。一日一日を充実させていこう。そして一生の友達を作るとともに、勉強、スポーツや芸術などに打ち込んでほしい」とエールを送り、授業を締めくくった。



やりがいは自分でつくるものだと言ふ山野常務

第12回 富山県立富山南高等学校

12月14日(土)、市森友明氏(株新日本コンサルタント取締役社長)が富山県立富山南高等学校において、1学年240名を前に、「高校生みなさんに今だから伝えたいこと『社会人として経済人として』」と題して課外授業を行った。

市森社長は、はじめに「人間は働くために生まれてくる。生活やお金のために働くことで社会が持続し発展する」と語り、そのためには勉強しなければならぬと勉強の意義を強調した。

つぎに、高校生も社会人も目の前のことに努力することは同じで、努力はしんどいし努力しても成果がでないことがあると述べた。さらに努力と成長の関係について「成長の壁」を説明し、松岡修造氏の「100回叩けば突破できる壁があっても、99回であきらめてしまう人がある。その人は今までの努力やかけてきた時間が無駄

に終わってしまう」を紹介、「成長の壁」の前後の努力差は小さいが、成長度は大きく異なると訴えた。そして、このことをわかっていれば成長している実感がなくとも努力する動機ができると説き、「『成長の壁』を超えると勉強も仕事も楽しくなる。このことをわかっているだけで、社会人になる前、さらには就職後も大きな差になる」と力説した。

最後に、「努力は幸福を手に入れる手段ではなく、努力そのものが幸福を与えてくれる」というトルストイの言葉を引いて、生徒たちに熱いメッセージを送り、授業を終えた。



社会で働くという現実を今から意識しようと市森社長

第13回 富山県立石動高等学校

12月16日(月)、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)が富山県立石動高等学校において、3学年商業科40名、1学年160名を前に、それぞれ「夢を持つこと」と題して課外授業を行った。

大橋社長は、はじめに「働くこととは周りの人を楽にさせることであり、社会をよくすることである」と語るとともに、海外教育事情視察で訪問した国々の就業を見据えた教育などを紹介した。

つぎに、レストラン事業を通して社会貢献したいとの想いから、失敗を徹底検証し反省を生かし、失敗を恐れず再チャレンジ精神を持って新たなレストラン経営を軌道に乗せた経験を紹介。また「存在感謝」を大切にしていると述べ、「感謝の心を持ち、常に謙虚で向上心を持ち続けよう」と呼びかけた。

さらには「高校生の進路と職業意識に関する

調査」結果から、日本の高校生がアメリカ・中国・韓国に比べ『偉くなりたい』と考える比率が大変低いと指摘。「偉い人とは偉ぶる人ではない。社会に貢献できる人だ」と力説した。

最後に、野球のイチロー選手やサッカーの本田圭佑選手が小学生時代に夢について書いた作文などを引用し、「明確な目標を持って夢を実現しようとする努力が大切だ。成功するまで失敗を積み重ねて頑張してほしい」とエールを送り、授業を締めくくった。

なお、この授業は大橋社長も参加し昨年8月に実施した第4回海外教育事情視察に参加した教員の勤務校で行った。



失敗を恐れずチャレンジしようと言ふ大橋社長

第14回 富山県立高岡高等学校

1月27日(月)、市森友明氏(株新日本コンサルタント取締役社長)が母校の富山県立高岡高等学校において、2学年人文社会科学科22名を前に、「日本経済と公共投資について」と題して課外授業を行った。

市森社長は、はじめに日本経済とアベノミクスについて説明。先進諸国の中で日本のGDPの低調さが際立ち、世界における日本のプレゼンスが著しく低下していると紹介。公共投資によるデフレ脱却が「第二の矢」であり、GDPの拡大、税収増につながると強調した。

つぎに、経済のグローバル化について言及し、グローバル化の進展は賃金の低下をもたらし格差を生み出すと解説し、反グローバル化政策の必要性も訴えた。

また、給与所得者の平均年収、上場企業各社

の平均年収や国家公務員・富山県職員の年収を紹介。年収によって人生が決まるわけではないが年収は入る企業によって支配されるので、高校時代に知っておけば今後の人生の参考になると語った。

最後に、勉強はお金を稼ぐ力や企業人として社会に通用する力を得るため、また、職業の選択を幅広いものにするためやグローバル資本主義の勝ち組に入れるために必要だと力説して、授業を締めくくった。

なお、この授業は富山県金融広報委員会(事務局:日本銀行富山事務所)との共催で実施した。



年収を知ることとは今後の参考になると市森社長

第15回 上市町立相ノ木小学校

1月29日(水)、浦山哲郎氏(学浦山学園理事長)が上市町立相ノ木小学校において、6学年34名を前に、「夢のもち方」と題して課外授業を行った。

浦山理事長は、まず「志」とは簡単には手が届かない遠くにあって想いを馳せるものであり、そのための努力は自分だけでなく他の人のためになるもの、そして簡単にあきらめず努力をするもので夢と同義であると語り、欲望との違いを強調した。

また、ひとの体の大きさは倍も変わらないが、心の大きさは何百倍にもなる。夢をかなえるためには、常に心を大きくもつようにしてほしいと訴えた。そして、司馬遼太郎氏の『21世紀に生きる君たちへ』から「自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。このため、助け合う、ということが、

人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のもとのものは、いたわりという感情である」を紹介。心を大きくするためには、「心の栄養」として、いたわりや優しさをどれだけ自分に取り入れることができるかが重要だと説いた。

最後に、「2020年には東京オリンピックが開催される。この6年間で夢がかたちになるようしっかり頑張ろう」と述べ、授業を締めくくった。

なお、この授業は浦山理事長も参加し昨年8月に実施した第4回海外教育事情視察に参加した教員の勤務校で行った。



夢を大きくもつことが大切と浦山理事長

第16回 黒部市立生地小学校

2月4日(火)、四十物直之氏(株四十物昆布取締役社長)が母校の黒部市立生地小学校において、6学年38名を前に、「目標をもつことの大切さ」と題して課外授業を行った。

四十物社長は、はじめに目標をもっているかと問いかけ、目標は明確なほど実現する可能性が高いと続けた。そして、目標を紙にしたためたりひとに宣言したりするなどして、成功体験を積み重ねることによってさらなる成功につながると語った。また、目標や夢は変わってもよいので前向きに行動してほしいと訴えた。

続けて、野球のイチロー選手の小学6年生時代の作文「僕の夢」を紹介し、夢をかなえるための努力の大切さを強調し、夢のためには時として我慢も必要だと説いた。「夢が人を輝かせ、

希望が人を大きくする」という中尾哲雄特別顧問の言葉も披露した。

さらに、郷土富山の先人の偉業を紹介し、基礎学力を身につけるだけでなく、故郷や自国の歴史や文化を理解するとともに他国のそれも理解して行動できる国際人になることを目標にしてほしいと熱く語った。

最後に、「今勉強しなければならぬのは目標や夢のために自分自身を磨く必要があるからだ。みなさんには無限の可能性がある。今やりたいと考えていることを思いっきりやってほしい。必ず達成できる」とエールを送り、授業を終えた。



目標や夢のために努力しようと語る四十物社長

第17回 富山市立岩瀬小学校

3月1日(土)、新田八朗氏(日本海ガス(株)取締役社長)が富山市立岩瀬小学校において、全学年145名を前に、「岩瀬でうまれたきみたちへ」と題して課外授業を行った。

新田社長は、はじめに「岩瀬小学校ができた頃は全員が学校に行けたわけではなかった。しかし今では全員が学校に行ける。世界にはまだまだ学校に行きたくても行けない子どもたちが多くいる」と学校で勉強ができることが幸せだと述べた。

そして、勉強して文字が読めることで、読書ができ様々な知識を得ることができるので、将来世界に飛び出してそれらを自分の目、耳や心で確認してほしいと訴えた。そのためには「身体」「頭」「心」の健康に留意する必要がある、よく食べよく運動しよく眠り、読書をする、また「心」の健康を保つには希望(夢)をもつこ

とが大切だと強調した。

さらに、学校でのグループ活動に大切なこととして、①ルールを守ること、②ひとに親切にすること、③嘘をつかないこと、④友だちを増やすことをあげた。

最後に、勉強の目的は世の中の役に立つため、将来のために勉強をしておくことが重要だと諭し、「いろいろ競争することもあるが、競争相手は敵ではなくライバルであり仲間だということを忘れないでほしい」と語り、講演をしめくくった。

当日は創校141周年記念式が開催され、関係者や保護者など参加者も聴講した。



「1冊でも多くの本を読もう」と新田社長

第18回 富山県立砺波高等学校

3月5日(木)、富山県立砺波高等学校において、1学年199名を対象に、川合声一氏(日の出屋製菓産業(株)取締役社長)、米屋慎一氏(北星ゴム工業(株)取締役社長)、館直人氏(たち建設(株)代表取締役)、萩原正剛氏(株)スリーティ取締役会長)、遊道義則氏(株)ユニオンランチ取締役社長)の5名が課外授業を行った。

川合社長は、「地域密着型企業のグローバル戦略 ～世界に誇るにっぽんの食文化を通じて～」と題して、授業を行った。

まず、ローカル・地元密着の企業であっても、国際的な幅広い考え方が必要であると説明した。また、中堅企業が大手企業に対抗する方策として、地元産の素材を使用するなどマーケティングにおいて他企業との差別化・独自性を出すことが非常に重要であると力説した。

次に、「今後、マーケティングのなかで多様な側面からお客様にアプローチする『オムニチャンネル』『オムニマーケティング』という考え方が重要になる」と熱く語った。また、単に

商品を売るだけではなく、「とやまの良さをPRして、とやまを売ると同時に商品を売る」、「商品を通してとやまの良さを売る」ことがローカル企業としての大事なポイントであると紹介。

最後に「和食がユネスコの世界文化遺産に登録された。皆さんが住む富山の食の素晴らしさをもっと知ってもらいたい」と語り、授業を終えた。



「とやまの食を世界に広めたい」と川合社長

米屋社長は、「富山発 ニッチな製品で社会に貢献」と題して、授業を行った。

まず、社業の沿革や概要を紹介し、生産拠点が黒部市や入善町にある地元根ざした企業であり、製品の工業用ゴム製品は建築物、自動車や新幹線車両の機密材など機能を保持するための非常に重要な部分に使用されていると説明した。

続けて、同業者の多くは太平洋側に所在するため、日本海側に所在する「弱み」を「強み」にしようと考えて経営してきたと語り、「できないということは考えず、前向きに何事にも挑戦する。できるようになるためには何をすべきかを考えている」と説いた。そのうえで、失敗をしてもしっかりと分析し試行錯誤することによりノウハウを蓄積することは勉強も同じで、得意分野を伸ばし弱点を克服することが重要だと訴えた。

さらに「これから皆さんは様々な困難に直面していくと思うが、乗り越えられない苦労や困難は絶対はない。乗り越えられた経験は必ずひとを成長させる」と熱く語り、多くの経験を積むことが成功につながると激励した。

最後に、稲盛和夫氏の著書『燃える闘魂』より、中村天風の「目標が成就するかどうかは、不屈不撓の一心、つまり、どんなことがあろうとも決して挫けない心にある」という言葉を紹介し、目標を達成するためには自分の心の持ちようが最も大切であると述べ、授業を締めくくった。



「当たり前前を当たり前前にできる人間になって欲しい」と米屋社長

館社長は、「義務と権利」と題して、授業を行った。

はじめに、仕事で対価を受け取る以上いい加減な仕事をしてはいけないと述べ、「お天道様が見ているから」と法令を遵守して仕事に取り組む重要性にふれながら、自身のプロフィールや社業について紹介した。そして、「教育には受けさせる義務と受ける権利があり、勤労も義務と職業選択の権利がある。納税の義務は地域に貢献するという意味では大変大切だ」と説明し、自分の権利ばかりを主張し義務を果たさない人や会社であってはいけないと訴えた。

続けて、「損得勘定」の考え方を紹介。目先の「得」に目がくらみ「損」をしないようにと強調し、「嘘の多い人、約束の破る人やくだらない見栄を張る人は見透かされる」と述べた。

また、「常に学びの意識を持ちひとに教える

請いながら、志が同じ仲間と連携・協力することによって、ひとりでやるより違う力が生まれてくる」とアドバイスした。

さらに、様々な社会のニュースに目を向け、「自分ならこうはしない」という精神を自分に植え付けて欲しいと訴え、学力も大事だが普遍的な道徳観や価値観を持つことが重要だと説いた。生徒たちは熱心に聴き入っていた。

最後に、「求めるだけではなく自分に何ができるかを意識して学生生活を送って欲しい」とエールを送り、授業を締めくくった。



「権利ばかりを主張して義務を果たさない人であってはいけない」と館社長

萩原会長は、「私の歩んだ道」と題して課外授業を行った。

まず、小学校1年生の時に終戦を経験し、「私の人生は、さきの大戦に非常に影響を受けている。戦争は絶対にあってはならない」と述べ、平和の大切さ、かけがえのなさを熱く語った。

また、幼いころ、命にかかわるような大けがや病気をした経験から、「周りの多くの方々のおかげで今がある」こと、「周囲への感謝の気持ちを忘れてはいけない」ことを伝えるとともに、「人間には気力、体力、知力が必要であり、なかでも重要なのは気力。そのベースとなるのは健康」であり、健康でなければ、何もできないことを強調した。

最後に、「大学進学や就職などで県外に出る

こともあると思うが、地元に戻ってきて活躍してほしい。また、しっかり勉強することも大事だが、同時に、世の中に貢献するにはどうしたらいいか、自分の人生をどうするか、悔いのない人生を送るにはどうすればいいかということ、を、しっかりと考えてほしい。人それぞれ生き方は異なるので、『これだ』という答えはない。小さなことをコツコツと継続していくことも大事。ぜひ、悔いのない人生を歩んでいただきたい」とエールを送り、授業を終えた。



「悔いのない人生を」と訴える萩原会長

遊道社長は、「観て、聴いて、感じる生き方を！」と題して、授業を行った。

まず、社業の概要や特長を説明し、社員が業務を遂行するためには経営目的・理念－仕事の価値判断基準やチーム力が必要で、学校などの組織でも同様だと語った。

そして、仕事に就く際には経営理念やそれがしっかりと実践されているかどうかを知ることが重要だと訴えた。

続けて、次代を担う皆さんには「観て、聴いて、感じる生き方」をしてほしいので、覚えておいてほしいと、人材系コンサルタントのウィリアム・ブリッジズ氏の「トランジション」（人生の転換期）の考え方を紹介した。「何かが終わる時期」「混乱や苦悩の時期」を経て、「新しい始まりの時期」に至ると説明し、その上で「人生は選択の繰り返しだ」と強調した。

さらに、「終了」と「完了」は異なり、「終了」

したことについて熟考し「完了」させることが大切だと論じた。

最後に「人生には悩む時期やターニングポイントが絶対にやってくる。人生は自分で決めていかなければならない。その際には冷静になって立ち止まり、何を観て、聴いて、感じているのか考え、客観的に事実として捉え、振り返ってみることが重要だ。

そして、成功をイメージし具体的な計画を立て、絶対にやると決めて絶対にやること。これを覚えておいて、進路や就職などに役立てて欲しい」とエールを送り、授業を終えた。



「何を感じ、何に気づき、何を学び、次にどう生かすかを考えよう」と語る遊道社長

第19回 富山県立呉羽高等学校

3月6日(木)、市森友明氏(株新日本コンサルタント取締役社長)が富山県立呉羽高等学校において、1学年190名を前に、「将来社会人として自立するために 一高校生の時から意識しておくこと」と題して課外授業を行った。

市森社長は、はじめに「人間は働くために生まれてくる。生活やお金のために働くことで社会が持続し発展する」と述べ、働く準備のためには日々の学習が重要で、学習が人生を豊かにすると強調した。

つぎに、高校生も社会人も目の前のことに努力することは同じで、努力はしんどい、努力しても成果がでないことがあると説き、努力と成長の関係について「成長の壁」を説明。「100回叩けば突破できる壁があっても、99回であきら

めてしまう人がいる。その人は今までの努力やかけてきた時間が無駄に終わってしまう」という松岡修造氏の言葉を紹介。「成長の壁」の前後の努力差は小さいが、成長度は大きく異なると訴えた。そして、「『成長の壁』を超えると勉強も仕事も楽しくなる。このことがわかっているならば努力する動機ができる。社会人になる前、さらには就職後も大きな差になる」と力説した。

最後に、トルストイの「努力は幸福を手に入れる手段ではなく、努力そのものが幸福を与えてくれる」という言葉を引いて、生徒たちにエールを送り授業を締めくくった。



「学習は将来の生き方や働き方の選択を拓ける」と市森社長



教員対象の講演

社会の役に立つことが教育の原点 ―牧田常任幹事が小矢部市立大谷小学校で講演―

8月6日(火)、牧田和樹氏（㈱牧田組取締役社長）が小矢部市立大谷小学校において、中川愼一校長をはじめとする教員22名を前に、「企業経営と学校経営」をテーマとした講演を行った。今回の講演は、本年5月に牧田氏が同校で課外授業講師を務め、教員にもぜひお話をしたいと要望があったため実現した。

牧田氏は冒頭、「経営」と「運営」の違いについて参加者に質問し、「経営とは、筋が通っていなければいけない。大筋を立てて仕事を切り盛りする事だ」と説明した。そして、企業経営における事業主と顧客との関係を図解したうえで、「世の中にあるものは必ず何かの役に立っているから残っている。企業も同じで、世の中に必要・役に立っているからこそ存在できる」と語った。

また、企業組織において最も重要なことは人間と人間の「間」を繋ぐこと（＝コミュニケーション）であると力説した。

後半では、「企業と顧客の関係を学校に置き換えた場合、顧客に相当するのは「生徒」ではなく、「社会」である。「社会」に教育された生徒を送り出すことで社会に貢献している。教師の皆さんはおそろしく大きなお客さまを相手にしているということを意識して欲しい」と熱く語った。

質疑応答では、生徒たちのコミュニケーション能力を高めるために必要なことを問われ「思いやり」と即答、コミュニケーションの基本は相手を思いやることでしか生まれないと語った。

最後に、社会の役に立つことが教育の原点であり、社会に対して何ができるかを常に考えることを学校に求めたいと語り、講演を締めくくった。



魅力ある教育者に ―中尾特別顧問、校長会で講演―

8月27日(火)、高志会館で開催された県立学校 校長研修会で中尾哲雄氏（㈱インテック最高顧問）が「緒につくー学生寮の思い出ー」と題し2時間にわたって講演。以下は講演要旨。

『大学入学時から肺結核で療養中であり、1年間は授業にほとんど出ず安静に横になっていた。部屋の先輩たちの落書きから、その後多くの人間関係を深めていった。』

同室の先輩は哲学専攻の4年生。教授が廊下伝いに部屋に来てゼミナール。テキストはケルケゴールの「死に至る病」。先輩について教授室へも行き、とうとう15週、ゼミに出席したが、哲学にのめりこんでしまった。

その先輩（松本出身）と唐木順三氏の講演を聴いた。「緒につく」という信州教育についてであった。

新任の先生たちが、何年かすると、例えば朝には論語など修養の書、放課後は直接教科に関する本、夜は根底となる学問、文芸の書や哲学通論を読み始める。そしてそれらを校長たちが支援する。そうすると彼も緒についたかという

ことになる。信州に魅力ある先生が多いのはそれによるものだ。私は大きな感動を覚えた。

実業界においても同じことが必要。仕事をうまくこなしていく人と「仕事ができる」人は違う。後者を育成していかなければならない。要するに教師が教師になるための努力が重要である。

非人間化、機械化等の傾向の中で、教師は実に個性的・人間的な業である。教師は職業の中でもっとも上級なものといっても過言ではない。それ故に自己究明、自己啓発が重要である。

寮のそばのヘルン文庫（小泉八雲）によく行って多くを読んだ。八雲会の顧問をしている。（詳細は省略）

高校時代の先生たちと半世紀以上にわたっておつき合いした。あたたかい師弟関係こそ教育のベースである』



失敗を恐れずチャレンジを大切に 一大橋元教育問題委員長が進路指導研修会で講演—

10月10日(木)、富山県総合教育センターで開催された「平成25年度中・高進路指導研修会 全体研修会」において、大橋聡司氏（大高建設㈱取締役社長）が「企業が学校教育に望むこと」と題して、進路指導主事約70名を対象に講演した。

大橋社長は、まず、当会の教育問題への取組みについて、各地同友会から高い評価を得ていると説明。本年6月に開催した栃木県、群馬、新潟、中部経済同友会と当会との「教育担当委員会 交流会」など各地同友会との交流について紹介した。

また、課外授業講師派遣事業の意義や効果を説き、積極的な活用を呼びかけ、過去4回の海外教育事情視察で現役教員らとともに訪問した国々の実情についても説明した。

そして、高校卒業後の就職や進学などの進路について、身近な事例をあげ、本人の希望や家庭環境などを斟酌しながら、しっかりと指導してほしいと要望した。

さらに、レストラン事業の失敗を徹底検証し、失敗を恐れず再チャレンジしたと語り、「人財育成」が重要で自己実現は数多くの感謝の上に成り立つと強調した。

それから、「高校生の進路と職業意識に関する調査」結果から、日本の高校生がアメリカ、中国、韓国に比べ「偉くなりたい」と考える比率が大変低いと指摘した。その上で、日本の将来を担う人材を育成するため、「社会の役に立つ立派な人間になりたい」と考える子どもたちを育成してほしいと訴えた。

最後に、「学校教育の役割は大きいのでぜひ頑張ってもらいたい。そのためには富山経済同友会としてもできる限りの応援はしていきたい」との強い期待を述べ、講演を締めくくった。



21世紀を生きる子どもたちへ 一新田特別幹事が富山市小学校教頭会で講演—

1月15日(水)に富山市立速星公民館で開催された「平成25年度富山市小学校教頭会 全体研修会」において、新田八朗氏（日本海ガス㈱取締役社長）が「21世紀を担う人づくり」と題して、富山市の小学校教頭約60名を対象に講演を行った。

新田社長は、①生態系や環境問題などを考える場として富山市ファミリーパークへ行くこと、②死や生を考える機会として身内の葬式に参列すること、③学ぶ目的は将来働くためであること、④人生は複線であり様々な選択肢があることを、子どもたちに伝えてほしいと述べ、教頭に対しては⑤組織を進化させるためにPDCAサイクルを回すことをお願いしたいと語った。

さらに、人生は一生勉強であることを教え、それぞれの楽しい勉強の方法を見付けるサポートをしてほしいと続けた。そして、勉強する目的はよりよく生きるため、働いて世の中の役に立つため、幸せに生きるためであると説いた。

また、小学校時代は基礎を固める重要な時期なので、自主性に任せるだけでなく厳しくも愛情をもって接することが必要だと訴えた。

そのうえで、村上龍氏の著書『13歳のハローワーク』を紹介。掲載されている職業が初版の514種類から7年間で89種類も増えていることを指摘し、時代に応じて様々な職業があり、現在の延長で将来を決めることはできないと強調。今は基礎をつくっておくことが重要で、人生の選択肢は一本道ではないことを早い時期に伝えるべきだと語った。

最後に、「世界には勉強をしたくてもできない子どもたちが多くいる。勉強ができることは幸せだと伝えてほしい」と要望し、講演を締めくくった。



思い出に残る先生になってほしいー石坂教育問題副委員長が指導主事等研修会で講演ー

1月20日(月)に富山県総合教育センターで開催された「平成25年度第12回指導主事等研修会」において、石坂兼人氏(石坂建設㈱取締役社長)が「小・中学校の教育に期待すること」と題して、教育事務所や県総合教育センター等の指導主事等約70名を対象に講演した。

石坂社長は、海外教育事情視察、課外授業講師派遣や提言活動など当会の教育問題委員会の取組みを紹介した後、経済界からみた教育現場について語った。

まず、企業と異なる点として、教員は尊敬される立場にあり「倒産しない」安全な職場で仕事(教育)に専念できることなどを挙げた。また、教育現場の特異性として、新規採用者が担任を持ち「先生」と呼び合うなど「新人」の取扱い、年功序列や前例主義、社会性が欠如した教員、保護者の存在などの問題を提起し、改善の必要性を訴えた。

そして、子どもの人格形成期に家族以外で長

時間接する大人として「思い出に残る先生になってほしいし、そのような教員を育ててほしい」と述べた。

さらに、校長や教頭は組織のリーダーとして少数のおかしな意見に耳を傾けず、子どものためになるのは何かをしっかりと見極め、信念をもって教員を守ってほしい、正しいことを正しいと言える技術を身につけてほしいと激励した。

最後に、好きな言葉として「過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられる」を紹介し、「組織のリーダーになる皆さんであれば未来を変えられるし、自分が変われば周りも変わっていく。大変な職場だが、子どもたちの未来のためにぜひ頑張してほしい」とエールを送り、講演を締めくくった。

